2018年2月17日（土）　インド大使館　ウパニシャッド（第21回）

今日はシュリー・ラーマクリシュナのお誕生日でとても神聖な日です。我々のラーマクリシュナ・ミッションの本部（インドのベルル・マート）ではいろいろな儀式が朝から始まっています。

今日のウパニシャッドは今年になってから初めてです。我々は今、カタ・ウパニシャッドの勉強を続けています。カタ・ウパニシャッドは物語を使っています。ナチケーターは若くてとても神聖な方で、頭も良く、大変に尊敬を持っている人です。ナチケーターは死神ヤマの場所に行きました。

ナチケーターがヤマの場所に着いたときヤマは留守にしていました。ヤマは留守から戻るとナチケーターに挨拶をしてから３つの願い（ナチケーターがヤマを待っていた３日間に対する恩恵）をかなえますと言いました。ナチケーターの最初の願いは何だったですか。

**≪ナチケーターの最初の願い（復習）≫**

ナチケーターのお父さんはナチケーターの言葉に怒ってナチケーターを死神にあげると言いました。そのためにナチケーターはヤマの場所に来ましたが、それはお父さんの本心ではなかったことをナチケーターは知っていましたから、最初に次のように願いました。

お父さんは心配がなくなり安心して寝ることができますように。そしてお父さんの怒りが消えますように。それからナチケーターが死神の場所からお父さんの場所に戻ったときお父さんはナチケーターだということがわかりますように。お化けではない、幽霊ではない（笑い）。そしてお父さんとまた普通に会話をすることができますように。

**≪ナチケーターの２番目の願い≫**

２番目の願いは「どのようにして天国に行くことができるかを教えてください」です。ナチケーターは天国に興味を持っていました。前回、天国のことをたくさん説明しましたね。皆さん、天国に興味がありますか。あまりないでしょうか。今この世界には天国のすべての楽しみが出ていますから。

この世界になくて天国にあるものは何ですか。天国にはすべてあります。食べ物、飲み物、服、等々。インターネット、コンピュータはこの世界にありますが、たぶん天国にはない。そういうものもあるかもしれない（笑い）。

この世界ではお金がかかりますが天国ではお金がかからない。それは大きな違いです。この世界では楽しみを得ようとすれば一生懸命働かないといけないです。それは大変です。その違いが一つあります。

もう一つの違いはこの世界では病気の可能性があります。例えば、この世界ではお金がたくさんあればたくさんの食べ物を買うことができますけれど、食べ物を消化する力が追い付かずにお腹を痛めることがありませんか。

もう一つの違いは寿命です。今、日本は世界の中で一番長生きの国ですね。女性の方が男性よりも長生きです。しかし、人間の寿命はどれくらいでしょうか。長寿でも１２０歳くらいでしょうか。しかし、天国では１００万年が可能です。これがもう一つの違いです。けれども、天国でも或るときに寿命が終わります。

それから、前回は天国にレベルがあることも説明しました。覚えていますか。毎回の講話の内容はヴェーダーンタ協会のホームページにアップロードされますからそれを見てください。インド大使館で一度だけ話を聞いてもわからないことがけっこうあると思います。勉強のためには講話のテキストデータを読んでください。それが私の助言です。

さて、今日のお話しは天国に行く方法です。お金がたくさんあればアメリカでもヨーロッパでもインドでもどこへでも行くことができます。しかし、天国に行くためにはお金がたくさんあっても助けになりません。天国に行くには一つ方法があります。それは何でしょうか。

簡単な方法です。答えは儀式（ヤッギャー）をすることです。それは「火の儀式」です。天国に行くための方法は火の儀式を行うことです。ところで、天国に行きたいというのは「欲望」であって「解脱の願い」ではありません。天国での楽しみがほしいというのは欲望です。その執着がありますから天国に行きたい。執着がないと天国に行きません（笑い）。

それで天国に行くためには今お話ししたように儀式が必要です。それは昔からずっと変わりません。別の方法はないです。それがヒンドゥー教の方法です。他の宗教には別のアイデアがあるでしょうが、ヒンドゥー教の聖典の考えによれば儀式が必要です。それも特別な儀式です。それが火の儀式です。その火には特別な意味がありますがそれは後でお話しします。

さて、儀式は一つの「カルマ」ですから、例えば、或る求道者が儀式をしますと儀式の結果、すなわち、カルマの結果が出ます。そして、或るカルマの結果はすぐに出ますが天国へ行くための儀式（カルマ）の結果はすぐには出ません。

そしてカルマの結果はどなたが与えるのでしょうか。例えば、労働者（サラリーマン）が働きますと会社が給料を出します。召使が働きますとその召使の主人がお金をあげます。では、カルマの結果はどなたが与えるのでしょうか。

**＜ヴェーダの二つの部分～カルマ・カーンダとギャーナ・カーンダ＞**

それらに関して二つの意見があります。ヴェーダの二つの部分に基づくものです。ヴェーダの二つの部分とは、①儀式の部分（カルマ・カーンダ）と②知識の部分（ギャーナ・カーンダ）です。それらの哲学（名称）と哲学者は次の通りです。

　① Pūrva-Mīmānsā（哲学）＝　Mīmānsaka（哲学者）

② Utara- Mīmānsā（哲学）＝　Vedānti（哲学者）

最初の哲学がプールヴァ・ミーマーンサー（Pūrva-Mīmānsā）で哲学者はミーマーンサカ（Mīmānsaka）です。その哲学の基礎は儀式です。ヴェーダの中に儀式のことがたくさんあります。儀式を行いその結果で天国に行く。それが人生の目的。その哲学者は人生の目的は天国に行くことだと言っています。

もう一つの哲学がウッタラ・ミーマーンサー（Utara- Mīmānsā）です。ウッタラ・ミーマーンサーはプールヴァ・ミーマーンサーの後に出た哲学です。その哲学者の名前がヴェーダーンティ（Vedānti）です。ウッタラ・ミーマーンサーと「ヴェーダーンタ」は一緒です。ヴェーダの知識の部分です。儀式のことは何も出ていません。

プールヴァ・ミーマーンサーの考えでは、天国に行くためのヤッギャー（儀式）を行いますと、そのヤッギャーの結果は或る場所に置かれます。すぐには天国に行きません。身体がなくなった後に天国に行きます。死ぬまでの間ヤッギャーの結果は或る場所に置かれます。

プールヴァ・ミーマーンサーの中では、そのヤッギャー（カルマ）の結果を与えるのが誰かということをはっきり言っていません。自然に結果が出ると言っています。カルマの結果は自然に出るので結果を与える人が特別にいるわけではないと言っています。

しかし、ヴェーダーンタの考えでは結果を与える人がいます。それは神様です。それがプールヴァ・ミーマーンサーの考えと違います。ミーマーンサカの考えではその人はいないです。ミーマーンサカによれば、カルマの結果は自然に出ます。出るまで或る場所に置かれます。

プールヴァ・ミーマーンサーの考えのように、人生の目的が天国に行くことであれば、死んだ後にその結果が出ます。しかし、ヴェーダーンタの考えでは、人生の目的は「解脱」です。天国に行くことではありません。なぜ「解脱」が人生の目的なのでしょうか。

なぜなら、天国に行きますとまたこの世界に戻る可能性があるからです。天国に行くときは「欲望」を持っています。普通の神には欲望がけっこうあります。執着、嫉妬、戦いがあります。欲望がありますとまた人間の命で生まれなければなりません。また生まれますと同じように苦しみ、悲しみが続きます。

苦しみ、悲しみを消して安定した至福を得たいのならば、高い知識、永遠な自由が人生の目的であるのならば、「解脱」のことを考えないといけないです。そのためのヴェーダーンタのやり方があります。例えば、無執着、識別です。

その結果で知識が出ます。そのやり方の結果は天国に行くのと同じではありません。結果が或る場所に置かれるのでもありません。結果はこの瞬間に出ます。この瞬間に知識が出ます。知識が出るということは（霊的な）無知が消えるということです。

知識はゆっくりゆっくり出るのではありません。例えば、考えられないほど長い間の暗闇、長年にわたる無知がありました。どれくらいの輪廻を経たか数えられないくらいの長さです。その暗闇、無知は、知識が現れるまでずっと続いていました。ですが、知識が出ますとその暗闇、無知はすぐに消えます。ゆっくり消えるのではなく、知識が出た瞬間に消えます。

ミーマーンサカの考えでは、天国に行く儀式の結果は或る場所に置かれます。儀式を行ってすぐに天国に行くわけではありませんから。ですから、儀式を行ってから死ぬまでの間がけっこう長い時間になることがあります。しかし、知識の場合は違います。

ヴェーダーンタのやり方を実践して知識が出ますと、その結果は瞬間に出ます。例えば、この部屋が窓も扉も全部閉まって暗いまま１００年誰も入っていなかったとします。１００年の暗さです。その１００年が経った後、誰かが灯りを持ってその部屋に入りますとその１００年の暗さはゆっくりゆっくり消えますか。消えるのにも１００年かかりますか。いいえ、１００年の暗さはその瞬間に消えます。

もし、ヴェーダーンタのやり方によって解脱できますと、悟りますと、悟ったその瞬間に、前世と今生のすべての暗闇、暗さ、すべての無知が消えます。それがヴェーダーンタ（解脱）とプールヴァ・ミーマーンサー（天国）の違いです。

**≪カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第１３節≫**

*sa tvamagniṁ svargyamadhyeṣi mṛtyo prabrūhi tvaṁ śraddadhānāya mahyam；*

*サ　ㇳヴァマグニㇺ　スヴァルギャㇺアッディェーシ　ムリッティョー　プラッブルーヒ　ㇳヴァㇺ　シュラッダダーナーヤ　マッヒャム；*

*svargalokā amṛtatvaṁ bhajanta etad dvitīyena vṛṇe vareṇa.*

*スヴァルガローカー　アムリタッㇳヴァㇺ　バジャンタ　エータッド　ドゥヴィティーイェーナ　ヴリネー　ヴァレーナ*

［「カタ・ウパニシャッド カタカナ読み表示と日本語解説」のサンスクリット語のカタカナ表記をマハーラージが最初に少しずつ唱えて皆がそれに続き唱え、最後にマハーラージと皆が一緒に唱える。以下の第１４～１５節についても同様です。］

節の語を分けます（節の中で２語以上が一緒になって１語になっている部分があるため）。「sa tvamagniṁ svargyamadhyeṣi mṛtyo prabrūhi tvaṁ śraddadhānāya mahyam」は、「saḥ tvam agnim svargyam adhyeṣi mṛtyo prabrūhi tvaṁ śraddadhānāya mahyam（サㇵ　ㇳヴァㇺ　アグニㇺ　スヴァルギャㇺ　アッディェーシ　ムリッティョー　プラッブルーヒ　ㇳヴァㇺ　シュラッダダーナーヤ　マッヒャム）」になります。

次の「svargalokā amṛtatvaṁ bhajanta etad dvitīyena vṛṇe vareṇa」は、「svargalokāḥ amṛtatvam bhajante etat dvitīyena vṛṇe vareṇa（スヴァルガローカーㇵ　アムリタッㇳヴァㇺ　バジャンテ　エータット　ドゥヴィティーイェーナ　ヴリネー　ヴァレーナ）」になります。

言葉の意味を説明します。ムリッティョーは「死神」です。ムリッティョーの本来の意味は「死ぬ」ですが前後関係でこの場合の意味は「死神」になります。なお、言葉の意味を取るために語を分けるとともに語順を変えることがあります。

サㇵ　ㇳヴァㇺ　スヴァルギャㇺは「天国へ行く道」です。アグニㇺは「火」ですが前後関係でこの場合は「火の儀式」（fire sacrifice）です。アッディェーシは「（ヤマ、あなたは）知っています」です。シュラッダダーナーヤは「（私は）信仰を持っています」です。

マッヒャム　プラッブルーヒは「私に説明してください（なぜなら、あなたは知っていますから）」です。マッヒャムは「私に」です。スヴァルガローカーㇵは、例えば、「天国」です。アムリタッㇳヴァㇺは「不死」です。バジャンテは「楽しんでいます」です。

エータットは「このこと」という意味で、「火の儀式についての知識」を指しています。ドゥヴィティーイェーナ　ヴァレーナは「私の２番目の願い」です。ナチケーターは第１２節で次のように言っていましたね。

*天国にはいかなる恐れもありません。死神よ、天国にあなたの影響が及ぶことはなく、したがって老いることへの恐怖もありません。飢えと渇きが人を悩ませることもありません。苦しみや悲しみもありません。天国では誰もが喜び楽しみます。*（第１２節）

そしてこの第１３節でナチケーターは死神に言っています、「死神よ、あなたは天国へ行く方法（火の儀式）を知っています。私にそれを教えてください。私は尊敬を持っています。あなたの言うことについて私の疑いは何もありません。私はあなたの教えを信じます」と。

しかし、教える方は尋ねた人が教えたことを理解することができるかどうかという疑いがあります。先生は教えたいですがその生徒のレベルがどれくらいかわかりませんから。ナチケーターは「そのことを聞くための準備が私にはあります」と言いました。ナチケーターの自信ですね。次は第１４節です。ヤマが言っています。

**≪カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第１４節≫**

*pra te bravīmi tadu me nibodha svargyamagniṁ nachiketaḥ prajānan；*

*プラ　テー　ブラヴィーミ　タドゥ　メー　ニボーダ　スヴァルギャマグニㇺ　ナチケータㇵ　プラジャーナン；*

*anantalokāptimatho pratiṣṭhāṁ viddhi tvametaṁ nihitaṁ guhāyām.*

*アナンタローカープティマトー　プラティッシュターㇺ　ヴィッディ　ㇳヴァメータㇺ　ニヒタㇺ　グハーヤーム*

語を分けます。「pra te bravīmi tadu me nibodha svargyamagniṁ nachiketaḥ prajānan」は、「pra te bravīmi tat u me nibodha svargyam agnim nachiketaḥ prajānan（プラ　テー　ブラヴィーミ　タット　ウー　メ　ニボーダ　スヴァルギャㇺ　アグニㇺ　ナチケータㇵ　プラジャーナン）」になります。

次の「anantalokāptimatho pratiṣṭhāṁ viddhi tvametaṁ nihitaṁ guhāyām」は、「anantalokāptim atho pratiṣṭhām viddhi tvam etam nihitam guhāyām（アナンタローカープティㇺ　アトー　プラティッシュターㇺ　ヴィッディ　ㇳヴァㇺ　エータㇺ　ニヒタㇺ　グハーヤーㇺ）」になります。

ナチケータㇵは「おお、ナチケーター」です。スヴァルギャㇺ　アグニㇺ　プラジャーナンは「私は天国へ行くための火の儀式を良く知っています」です。テー　プラブラヴィーミ　タット　ウーは、「私はあなたにその儀式のことを説明します」です。

メ　ニボーダは「私の言うことを集中して聞いてください」です。ヴィッディは、「（聞いて）理解してください」です。集中して聞いてくださいと言っているのは、その儀式は神秘的でとても難しく深いものだからです。それでよく聞いて理解してくださいと言っています。

ㇳヴァㇺは「あなた」です。エータㇺは「この」であり、火の儀式のことです。アナンタローカープティㇺは「天国に行く」という意味で、例えば、「不死になる」です。アナンタローカープティㇺのアナンタは、アンタがないということを意味します。

アンタとは或るものが「終わる」という意味です。終わるというのはそれが一時的であるということです。或るときから始まり或るときに消えます。なくなります。出ますけれど消えます。そのように時間で限定されたものがアンタです。

そしてアナンタは「アンタがない」ですから「終わらない」という意味になります。つまり、時間で限定されたものではないということですから、それは「永遠」ということです。天国についてその言葉（アナンタ）を使っています。

しかし、面白いことにそのアナンタは相対的な意味で用いられています。このことが混乱を起こします。自分だけでウパニシャッド（聖典）を勉強しますと書かれている言葉を普通の意味に取りますので混乱が生じます。

スヴァルガ（天国）は始まりますがやがて消えます。ですが、スヴァルガについてアナンタローカ（永遠な場所）と言っているのはなぜでしょうか。アナンタは「永遠」という意味ですが、スヴァルガ（天国）は永遠な場所ではないでしょう。

なぜなら、その言葉（アナンタ）は相対的な意味で使われているからです。相対的な永遠を意味しており、本当の永遠ではないです。どうしてこのような使われ方をしているかと言えば、天国はこの世界と比べて永遠のようだからです。それが相対的に使われている理由です。

この世界での人生の長さと比べれば天国ではとてもとても長生きです。ですから、それと比べると永遠です。しかし、本当は永遠ではないです。このように前後関係から理解しなければわからないことがありますから聖典の勉強は自学だけでは混乱が出ます。

アナンタローカープティㇺは、火の儀式によってアナンタローカであるスヴァルガ（天国）に行くということです。プラティッシュターㇺは「サポート」、「支えるもの」です。火の儀式の「火」は宇宙を支えるものです。

グハーヤーㇺのグハーの意味は「」ですが、前後関係でそれは人の「ハート」を意味します（ハートを「心臓」と訳しますと肉体的なイメージが出ますので「ハート」とします）。グハーはフリダーヤ（ハート）と同じです（ウパニシャッド講話-15参照）。グハーヤーㇺ　ニヒタㇺは「洞穴の中に隠れています」、「ハートの中に隠れています」です。

「隠れている」の意味は、普通には見えない、すぐには見えない、簡単には見えない、目で見えない、ということです。普通は洞穴の中に何があるか外から見えないでしょう。同じように我々のハートの中に何があるか見えないです。そして「真理」はそこに隠れています。

この「火の儀式」の「火」は普通の火ではありません。すべてのヤッギャー（儀式）のときに火は絶対に必要です。そのようにすべての儀式の中に火がありますけれども、「火の儀式」の「火」はその火の意味ではありません。「火の儀式」の「火」には特別な意味があります。

もし特別な意味がないのであれば、すべての儀式は火を使いますからどの儀式でもそれを行うと天国に行くことができることになりますが、それはできないです。このように、前後関係でこの第１４節の「火」には特別な意味があり普通の火を意味していません。

ですから、聖典の勉強のときには前後関係から読み解くことがとても大事です。そのために聖典の注釈者の注釈が必要です。学者であり聖者である方、例えば、シャンカラチャリヤ、ラーマーヌジャチャリヤ等の注釈が一番大事です。普通の学者の解釈には間違いがたくさんありますが、その人たちも注釈を書いていますので気を付けてください。

**＜「火の儀式」の「火」の意味 ～ 「ヒラニヤガルバ」とは＞**

火（アグニ）の話に戻ります。「火の儀式」の「火」は「ヒラニヤガルバ」と同じ意味です。アグニの普通の意味は火ですが、別の意味で「ヒラニヤガルバ」、「ブラフマー」です。それでは、「ヒラニヤガルバ」とは何ですか。

「ヒラニヤガルバ」は前に説明しました（バガヴァッド・ギーター2015-08-01-大使館講話参照）。これはヴェーダーンタ哲学の基礎的なアイデアです。基礎的なアイデアはぜひ覚えてください。それほど難しくないですからそれを何回も見て覚えてください。理解のレベルを上げるには基礎的なアイデアを覚えていることが必要です。

**Brahman（ブラフマン）**

　　　　↓

　　　　↓ ← **Māyā（マーヤー）**

　　　　↓

**Hiranyagarbha（ヒラニヤガルバ） / Virāt / Brahmā / Agni / Vāyu**

　　　　↓

**５つの要素（空、風、火、水、土）**

「ヒラニヤガルバ」の説明は上図の通りです。最初に「ブラフマン」があります。ブラフマンの特徴は何でしょうか。「永遠」、「無限」、「遍在」、「（純粋な）意識」、「自由」、「至福」ですね。これが「ブラフマン」の一つの基礎的な説明ですので覚えてください。

「ブラフマン」は形もなく（ニラーカラ）性質もありません（ニルグナ）。ブラフマンが顕現するときに「マーヤー」が入ります。マーヤーは「神秘的な幻」でブラフマンの別の姿です。ブラフマンとマーヤーが合わさって最初に現れたのが「ヒラニヤガルバ」です。

そのときから性質が始まっています。ブラフマンには形もなく性質もありませんが、ヒラニヤガルバの状態が出ますと性質が始まります。それがサグーナです。しかし、そのときも形はありません。性質だけです。（ウパニシャッド講話-8参照）

ヒラニヤガルバと同じ意味で「ヴィラート」、「ブラフマー」、「アグニ」、「ヴァーユ」（上図参照）という別の言葉が使われることがあります。いろいろな名前で同じ存在のことを言っています。ヴァーユの普通の意味は「風」です。

最初はブラフマン、その後がヒラニヤガルバ、ヒラニヤガルバの後が５つの要素です。最初の要素はアーカーシャ、（エーテル）です。この５つの要素を混ぜて精妙な要素が、その後に、精妙な要素を混ぜて粗大な要素が出ています。

そして粗大な要素を混ぜてこの宇宙が出ています。宇宙の中に、人間、すべての生き物、すべての物が出ています（ウパニシャッド講話-12参照）。ダーウィンの説によれば、人間はアメーバから進化しました（evolution）。そして破壊のときはその反対の方向に向かいます（involution）。

反対の方向に向かうとき、この宇宙は粗大な要素になり、粗大的な要素はその後、精妙な要素になります。精妙な要素からまたヒラニヤガルバになり、ヒラニヤガルバからまたブラフマンになります。ですから本当は破壊ではないです。現代の最先の科学者もこのヒンドゥーの哲学者と同じことを考えています。あるのはevolutionとinvolutionのサイクルそれだけです。

宇宙の創造についてはたくさんの見解がありますが、ヒンドゥー教の聖典の説明はとても論理的です。信仰は必要ありません。ヒンドゥー教の哲学の中で宇宙の創造を最初に説明したのがサーンキヤ哲学です。インドの一番古い哲学です。

サーンキヤ哲学の中に初めて宇宙の創造を説明するアイデアが出ました。それが「プラクリティ」です。（ヴェーダーンタ哲学では）「マーヤー」です。（バガヴァッド・ギーター2015-08-01-大使館講話参照）

マーヤーの中に３つのグナがあります（３つのグナでマーヤーをつくっています）。それがサットワ、ラジャス、タマスです。ヒラニヤガルバとその後の要素のすべてにその３つのグナが入っていますのでこの宇宙は３つのグナを混ぜて造られています。

さて、「火の儀式」の「火」は今説明してきたように普通の火ではなく、それは「ヒラニヤガルバ」です。そして、ヒラニヤガルバは「宇宙を支えるもの（サポート）」です。宇宙のすべての生き物、すべての物のはヒラニヤガルバです。このことから、「ヒラニヤガルバ」はプラティッシュターㇺ、すなわち、「すべてのものを支えるもの」であることがわかります。

そして、それは皆さんのハートの中に隠れています。「隠れています」の意味は、普通の方法では見ることも理解することもできないということです。それで「洞穴」のイメージが出ています。洞穴の中は外から見えないですから。

洞穴の中に何があるのかを見るには最初にその中に入らないといけないですね。そして中は暗いですから光を持っていないといけないです。同じように、ハートの中にあるアグニ、ヒラニヤガルバは普通の方法では認識することも理解することもできません。

我々は感覚器官で認識し心と知性で理解していますが、どうしてブラフマン（ヒラニヤガルバ）のことを理解することができないのでしょうか。ブラフマンは我々の中にいますけれどそれはハートの洞穴の中に「隠れています」ので、理解するには特別なやり方が必要です。

心をきれいにしなければいけません。エゴを取り除かないといけません。集中して真理のことを考えなければいけません。

さて、ヤマはこれからナチケーターに火の儀式を説明していきますが「私は今から説明します。あなたはよく集中して聴いてください。理解してください。なぜならとても難しいですから」と言っています。聴くための別の準備は全部ナチケーターにありました。

例えば、ナチケータは神聖な人です。霊的な人です。とても浄らかでとても頭も良い。しかし、それだけでは十分ではありません。ヤマが説明しようとするものはとても「精妙なもの」ですから、集中して聴いて理解しないと説明されてもわかりません。

私も同じことを言いました（笑い）、「皆さん集中して聴いてください。よく理解してください」と。教えようとしていることはとてもとても精妙なものだからです。次は第１５節です。

**≪カタ・ウパニシャッドPart 1 – Chapter 1 第１５節≫**

*lokādimagniṁ tamuvāca tasmai yā iṣṭakā yāvatīrvā yathā vā；*

*ローカーディマグニㇺ　タムヴァーチャ　タスマイ　ヤー　イシタカー　ヤーヴァティールヴァ　ヤター　ヴァー；*

*sa cāpi tatpratyavadadyathoktamathāsya mṛtyuḥ punarevāha tuṣṭaḥ.*

*サ　チャーピ　タットプラッティャヴァダディトークタマタースャ　ムリッテュフ　プナレーヴァーハ　トゥシュタㇵ*

節の語を分けます。「lokādimagniṁ tamuvāca tasmai yā iṣṭakā yāvatīrvā yathā vā」は、「loka ādim agnim tam uvāca tasmai yāḥ iṣṭakāḥ yāvatīḥ vā yathā vā（ローカ　アーディㇺ　アグニㇺ　タㇺ　ウヴァーチャ　タスマイ　ヤーㇵ　イシタカーㇵ　ヤーヴァティㇶ　ヴァー　ヤター　ヴァー）」になります。

「sa cāpi tatpratyavadadyathoktamathāsya mṛtyuḥ punarevāha tuṣṭaḥ」は、「saḥ ca api tat pratyavadat yathā uktam atha asya mṛtyuḥ punaḥ eva āha tuṣṭaḥ（サㇵ　チャ　アピ　タット　プラッティャヴァダット　ヤター　ウクタㇺ　アタ　アッスャ　ムリッテュフ　プナㇵ　エーヴァ　アーハ　トゥシュタㇵ）」です。tatpratyavadadyathoktamathāsyaは６語（tat pratyavadat yathā uktam atha asya）になります。

タスマイは「彼（ナチケーター）に」、ローカは「世界」です。アーディㇺは「一番最初の存在」です。タㇺは「それ」、アグニㇺは、例えば、「火の儀式」です。ウヴァーチャは「説明しました」です。ヤーㇵは「～の種類」、ヤーヴァティㇶ　ヴァーは、例えば、「どれくらい」です。イシタカーㇵは「レンガ」、ヤター　ヴァーは「どのように作る」です。

サㇵ　チャ　アピは「ナチケーターも」、タットは「同じことを」です。プラッティャヴァダットは「繰り返しました」、ヤター　ウクタㇺは「（ヤマの）言ったことを」です。ヤマの教えたことを全部ナチケーターは繰り返しました。

アタは「それから、その後」、ムリッテュフは「死神（ヤマ）」です。アッスャは「（ナチケーターが正しく繰り返すのを）聞いて」、トゥシュタㇵは「喜んで」です。プナㇵ　エーヴァは「また（さらに）」、アーハは「言いました」です。

全体の意味です。ヤマはナチケーターに言いました、「この宇宙（世界）の一番最初の存在はアグニです」と。「ヒラニヤガルバ」、「ヴィラート」、「ブラフマー」、「アグニ」は同じ意味でしたね。それで「このアグニは宇宙（世界）の一番最初の存在です」と言っています。

それからヤマはナチケーターに儀式の詳細を話しました。儀式ですから細かいことがいろいろあります。最初は祭壇を作る必要があります。火を使うために祭壇を作らないといけないです。使う火は普通の火ですが、儀式は特別なものです。

祭壇の作り方は具体的に決められています。例えば、祭壇の長さ、広さ、高さはみな決まっています。祭壇はレンガで作りますが、そのレンガの種類についても詳細があります。そしてレンガの数も決められています。

その後にも細かいことがたくさんあります。例えば、火の点け方です。もちろん、ライターで点けるのではありません。それのための特別なやり方があり、２つの木片をこすり合わせて火を点けます。このようにして儀式の火を作ります。

それで火を点けて儀式は始まります。儀式にはプリースト（司祭）も必要です。プリーストにはたくさん勉強しないとなれません。儀式はとても細かく複雑なものですからトレーニングが必要です。

儀式で唱えるマントラや捧げるものも決められています。間違いが一つでもあれば、結果は出ません。それだけでなく、反対の結果になる可能性もあります。良い結果が出ないで悪い結果の可能性があります。その危険性がありますからとてもとても気を付けないといけません。

また、マントラの発音がもし駄目だったらそれがまた問題になります。マントラを唱えるのにもいろいろ勉強しないといけないですね。例えば、前にお話ししたように「シャ」（便宜的にシャと記します）には３種類（S、Ś、Ṣ）あります（ウパニシャッド講話-17参照）。

講話の前に唱えるVedic Mantraは、「オーム　サハナー　バヴァトゥー　サハナー　ブナクトゥー　サーハ　ヴィーリャン　カラヴァーヴァハイー　テージャスヴィ―　ナーヴァディータマストゥ　マー　ヴィッヴィシャーヴァハイー」ですが、「ヴィッヴィシャーヴァハイー」を「ヴィッヴィサーヴァハイー」と唱えては駄目です。「サハナー　バヴァトゥー」も「シャハナー　バヴァトゥー」では駄目です（笑い）。

発音を完璧にするには先生についてたくさん勉強しないといけません。マントラの発音だけでなく、儀式全体を完璧にしないと結果は出ません。それだけでなく、天国に行かないで地獄に行く可能性があります（笑い）。

寄付（お布施）も正しくしないといけません。ナチケーターのお父さんはヴィシュワジット・ヤッギャーという儀式をしていましたが儀式の条件に従わず、本当は良い種類の雌牛を寄付しなければいけないのに、弱くて齢を取ったミルクも出ない雌牛を寄付していました。ナチケーターはお父さんのやり方に反対でした。これがお布施に関する一つの（悪い）例です。

ヤマはナチケーターにたくさんたくさん説明をして（火の儀式のやり方を）教えました。ナチケーターはとても特別でした。頭も特別に素晴らしく集中もできましたのでヤマが教えたことを全部正確に繰り返しました。

生徒がそれほど良い生徒だったら先生は喜びませんか。先生が何回も言っても覚えていないと先生の気持ちはあまり良くありません。皆さんもそのことを覚えてください（笑い）。ナチケーターは全部正しく繰り返したので死神は喜んでさらに言いました。何を言いました。それは次のクラスのときにお話しします。

［付記（Ｑ＆Ａ）］

１．「イシュワラ」と「ヒラニヤガルバ」について

「イシュワラ」は「ヒラニヤガルバ」と同じです。イシュワラにも２つの姿があります。一つの姿は「ブラフマン」です。もう一つの姿はヒンドゥー教の考えで、例えば、この宇宙を造ります、維持します、破壊します。それが「ヒラニヤガルバ」です。

　「ヒラニヤガルバ・ローカ」は一番上のレベルの天国ですがそこからまたこの世界に戻る可能性があります。ですが、もう一つはヒラニヤガルバの場所（ヒラニヤガルバ・ローカ）に入り、次の段階は「解脱」してブラフマンと一つになります。その可能性もあります。

或る種類の人はとてもとても特別の霊的な実践をしてヒラニヤガルバ・ローカまでも行くことができます。しかし、とてもとても小さい欲望でも欲望がありますとまたこの世界に戻らないといけません。もう一つの種類の人はヒラニヤガルバ・ローカに行って全然欲望がなくなりました。その種類の人は全然戻りません（解脱します）。

２．「聖者」と「神様の化身」について

聖者は前に無知がありました。後で無知が消えました。悟りました。それが聖者です。神様の化身には最初から無知はないです。聖者も最初は普通の人でした。無知を持っていました。マーヤーがありました。（霊的な）実践をして後で聖者になりました。聖者もレベルがいろいろあります。

聖者が生まれたのもカルマの法則の影響によるものです。アヴァターラ、神様の化身はそれではありません。神様の化身についてカルマの法則は何もないです。自分の意思で現れています。カルマの法則の影響ではないです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは聖者でした。生まれてすぐに聖者ではなかったです。しかし、シュリー・ラーマクリシュナは違います。神様が現れました。「ヒラニヤガルバ」は自分で現れました。どうして現れています。人生を導くためです。普通の聖者は解脱がほしい。神様の化身は解脱をあげる人です。それは大きな違いです。

３．「純粋な意識」について

「純粋な意識」という言葉がありますから、純粋でない意識というイメージが出る可能性がありますが、それは不純な意識とは言いません。「混ぜた意識」です。「純粋な意識」とは我々の中にある「魂」のことです。

しかし、皆さんは、自分についてのイメージが「私は身体、私は心、私は感覚」ではないですか。我々に意識がありますけれど、「魂意識」は出ていません。「身体意識」が出ています。意識と身体を合わせています（混ぜた意識）。

我々は物質ではありません。物質には意思がないです。意識を持っているのは生き物だけです。生き物だけに意思があります。例えば、富士山がヒマラヤの山に挨拶にいくことができますか。できませんね。大きいですけれど物質ですから。しかし、蟻はとっても小さいですけれど、意識を持っていますから、自分の意思があります。意識を持っているものだけに意思があります。物質には意思がないです。

我々には意識がありますから意思があります、考えがあります、働いています。しかし、我々に意識がありますがそれは「混ぜた意識」です。「純粋な意識」を持っていれば、身体を混ぜません。身体との関係を作りません。悟った人は身体を持っていますけれども、身体意識はないです。いつも意識は魂、魂、魂。「純粋な意識」です。

皆さんに意識はありますけれど混ぜています。（私を）身体と同一視し、感覚と同一視し、心と同一視しています。そして同一視していますから「純粋な意識」ではなくなっています。「純粋な意識」とは（私を）何とも同一視しないことです。いつも意識は、「私は魂、魂、魂」だけです。

身体を持っていますけれど身体と同一視しない。感覚を持っていますけれど感覚と同一視しない。見ても見ない。聞いても聞かない。働いても働きません。何が見ています。目が見ています。私は目ではありません。話しています。どなたが会話しています。私はいつも「傍観者」。それがヴェーダーンタの言うことです。

心はとても悲しい、苦しいですけれど、それは心の問題であって、私の問題ではない。身体がなくなっても私はなくならない。私と私の他の姿である人格（身体、心など）とは無関係です。識別しますと、「私は魂、魂、魂」だけです。

　魂は「（純粋な）意識」ですが、身体・心との同一視のことがありますから、その関係で「純粋な」という言葉を使っています。それがなければ、「意識」だけです。何とも同一視しないその状態ができますとそれが「悟り」の状態と一緒です。

以上